

## ～山形最古の板碑～ しょうげんがんねんだいにちいたび 正元元年大日板碑

県指定有形文化財（歴史資料）

板碑は板石塔婆とうぼとも言われ、先祖ないし本人の供養ために造られた、中世を代表する石造りの塔婆のことです。武蔵の国の青石塔婆が全国に広まる中、その地域から産出する石材が素材として多く利用されました。

置賜地域の板碑は、高畠町などから出土する凝灰岩ぎょうかいがんを石材とし、頭頂部が山型で、額部ひたいの突出があり、二条の線を刻んでいるのが特徴です。県文化財保護協会の発起者である川崎浩良氏は「山形県の板碑文化」という本の中で、このような板碑を「置賜型」と名付けています。

置賜地域には、県内で最も多くの板碑が分布しています。県内外の板碑を研究している加藤和徳氏の調査では、置賜には 863 基の板碑があり、川西町、南陽市、高畠町の順で多く、西置賜地域は少ないとされています。

これらの板碑のうち記念銘（年号等の記載があるもの）が認められるものは 50 基のみですが、その中で最も古い板碑が市内竹原に建てられています。大日の種子が刻まれており、鎌倉時代中期にあたる県内最古の板碑として県指定の有形文化財になっています。

梨郷神社の参道から西に入った如来堂の境内に 3 基の板碑が建っており、向かって左端が正元元（1259）年に建てられた大日板碑です。凝灰岩で作られ、高さ 2.57m、上部幅 81.8cm、額部で突出 18.2cm、中央部の厚さ 25cm の細長い優美な形をしています。碑面上面に彫られた五条の丸い圏線がつりん（月輪）は光背を表し、その中には胎蔵界大日如来を表す「ア」の種子やげんが薬研彫りで刻まれています。その下には見事な蓮座れんざが配され「正元元年大歳己未六月一日」の銘があります。もとは、あぜ道などの橋として利用されていたものを江戸時代末に建て直し、さらに現在地に移動されました。

これと並んで右側に、巳待供養塔みまち（己巳の日の夜に精進供養するために造立されたもの）に転用した同じ型の板碑と、頭頂部の幅が狭い板碑の 2 基が建っています。解説板には、正元の板碑とほぼ同時期のものとありますが、加藤氏は、前者は時代が少し後の鎌倉時代後期、後者は南北朝時代前期ごろとしています。



また、漆山字大仏おぼとけには、文和 3（1354）年に建てられた阿弥陀板碑があります。高さは県内で 2 番目に高い 4.12m もあり、その大きさに驚かされます。地元には「この碑よりもさらに大きい板碑を高畠町の日向から運んだが、堅雪が割れて谷地に沈んでしまった」という伝承が残されており、板碑の製作地や運搬の季節とコースを考えるうえで参考になります。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤庄一  
平成 26 年 12 月 1 日号 市報なんよう掲載